

批評と紹介

フラックスの「ジェンダー論」

有賀美和子

はじめに

20世紀後半、伝統的な西洋知の秩序的二元論構造の解体が、現代思想の尖端に交差する近代批判・脱近代論の文脈にある諸思想をとりこんで、進められてきた。この思想的文脈が、本稿でとりあげるフラックスの論文の底流となっている：Flax, J., "Post-modernism and Gender Relations in Feminist Theory" (*Signs* 12[1987], pp. 621-643)。現代という同時代をもっとも適確に表現する思考方法として、フラックスは精神分析学、ポスト・モダン哲学、フェミニスト理論という三者を挙げ、そのうちのフェミニスト理論に焦点をあてて考察していく。しかし時代のひとつの思想潮流として登場した70年以降のフェミニスト理論は、一元化された自律的な理論構造をとって存在しているわけではない。むしろエコロジカル・フェミニズム、マルクス主義フェミニズム、ポスト構造主義フェミニズムといった「種々のフェミニズム」¹⁾として存在している。

そこでフラックスは、フェミニストの諸理論がともに基調とすべき最終目的と対象を“gender relations”（両性関係）の分析であると明言する。バロンによれば²⁾、1980年代の女性学 Women's Studies は「第三期」の途上にある。第一期（1960年代後半）ではメインストリームへの「女性付加による揺がし」（“add women and stir”）アプローチを通じた女性史等の「補正的研究」（compensatory scholarship）あるいは改革運動等における女性の貢献を掘りおこす「貢献研究」（contribution scholarship）

1) 早川紀代氏によれば、今日のフェミニズムは従来の意味と異なり、性抑圧の廃止を、家族や産む性という立場に立脚して資本主義的生産様式のあり方や近代社会の構造を問い直すことによって実現する女性解放論という意味で用いられている（早川紀代「今日の女性論の視点」、『歴史評論』第443号、1987年）。

2) Baron, A., "Women's Studies in the United States," *Annual Report No. 10*, Center for Women's Studies, Tokyo Woman's Christian University, March 1989.

が展開された。また第二期（1970年代）では男女の経験における分断と差異を認め、女性を被抑圧者として捉える歴史観を超えて独自の「女性文化」の有効性と能動性を強調する「フェミニスト差異理論」(feminist difference theories)が展開された。しかし「付加」と「分断」の双方とも、既存のパラダイムの変換への戦略として最終的な解答ではないという大筋の合意が形成され、第三期の女性学は研究の視座を「女性」から「ジェンダー」³⁾へと転換し始めている。たとえばアメリカにおける女性学の草創期以来、研究の推進力になってきたスタンフォード大学の女性研究センター（Center for Research on Women; 略称CROW）はその名称を“*Institute for Research on Women and Gender*”とあらためた。いまアメリカにおいては、“*Women's Studies*”から“*Gender Studies*”への呼称の転換が浸透しつつある。しかしgenderの概念にかんするコンセンサスは、今後の議論を待つ余地を多く残している。以下、「フェミニスト理論におけるポスト・モダン主義と両性関係」と題するフラックス論文をつうじて、第三期女性学の中心課題であるジェンダーについて明らかにしていく手掛かりを探ってみたい。

I. メタ理論

フェミニスト理論にとりわけ有効な包括的カテゴリーとして、フラックスは「社会的諸関係」(social relations)分析と「ポスト・モダン哲学」のふたつを挙げている。すなわち前者は、人間経験のいかなる局面の構成要素ともなっている両性関係 (gender relations) は「普遍的本質をもたず、時の推移とともに変転していく」(原文 p. 624; 以下 () 内頁数はフラックス論文からの引用頁を示す) ものであり、「任意の人間における両性関係の経験および社会的カテゴリーとしてのジェンダー構造は、階級・人種等の他の社会的諸関係との相互作用によって順次形成されていく」(p. 624) ものであるといういわば関係論的な認識に拠る。そして後者は、ポスト・モダン哲学が「現代の西洋文化において嫡法として公認されている真理・自我・言語等にかんする信念にたいして懐疑を生じさせるという点でまさに“破懐的”である」(p. 624) というフェミニズムに共通するモチーフに拠っている。そのラディカルな懐疑の対象とは「啓蒙思想から導き出された信念」であり、それはフラックスによれば次のようなものである (pp. 624-625)。

-
- 3) ライザ・タトルの『フェミニズム事典』によれば、ジェンダーとは「社会的に賦課された」男女両性の分類を表わす用語である。“sex”が男女の生物学的・解剖学的差異を指すのにたいして、“gender”は所定の文化が身体的雄性・雌性に符合させて「男性性」・「女性性」として期待する男女の情感的・心理的屬性を指す。今日、sexとgenderは常に符合するとは限らないことがジョン・マネーらの医学的研究によって広く認められており、その二者間の「不一致」の認識が、フェミニスト理論における最も重要なコンセプトの一つとなっている (Tuttle, L., *Encyclopedia of Feminism*, Longman, Inc., 1986).

1. 安定的な首尾一貫した自我の存在。この啓蒙的自我は、自己の過程を明確に認識し、それを〈自然法則〉に仕上げる理性を有している。
2. 理性とその〈科学〉=哲学は、知に対する客観的で普遍的な基礎を提供しうる。
3. 理性の正しい使用によって獲得される知は〈真理〉となる。その知は、人間の精神および自然的世界の構造に関する真の普遍的な何物かを表現するであろう。
4. 理性はそれ自身、超驗的かつ普遍的な性質をもっており、自我の偶然的存在から独立している。肉体的・歴史的・社会的経験は、理性の構造や永久的知の生産能力に影響を与えない。
5. 理性、自律、自由の間には複雑な関連がある。真理や嫡法の権威に対するあらゆる要求は、理性の法廷に付託されるべきものである。自由は、理性の正しい使用の必然的結果に合致するよう、法にしたがって形成されねばならない。合理的存在としての正しい法則は、他のあらゆる合理的な存在にとっても合法であるだろう。その法にしたがうことにおいて、我は我自身の最善の超歴史的部分(=理性)にしたがっているのであり、また我自身の自律を発揮して自由な存在としての私の存在を裁可していくのである。その行為において、我は限定的・偶然的存在から逃れる。
6. 権威に対する要求を理性に根拠づけることによって、真理・知・力との間の衝突が克服され、真理が歪みのない力に奉仕する。したがって順次、知を力への奉仕に利用することによって、自由と進歩の双方が保証されるであろう。また、知は中立的で社会的に有益な(特定の利害に基づかない)ものとなるであろう。
7. 理性の正しい使用法の手本としての科学は、あらゆる真の知識に関するパラダイムでもある。科学は、その方法と内容において中立的であるが、その結果において社会的に有益なものとなる。またその発見過程をつうじて、〈自然法則〉を社会の利益に資することができる。しかし科学の進歩のためには、科学者は理性の法則に自由にしたがう必要があり、合理的言説の外部から生じる〈利害〉の仲介をしてはならない。
8. 言語とは、ある意味で透明なものである。理性の正しい使用だけが、真理を表わす知識に至りうるのと同様に、言語もまた、そうした表現を生じさせる媒体である。正しい真理要求と実在(real)との間の対応関係と同様に、〈言語〉と〈もの〉(thing)との間の対応関係が存在する。対象は言語的(あるいは社会的)に構成されるのではなく、ネーミングと言語の正しい使用によって意識のうえに表示されるにすぎない。

フラックスによれば、これらの秩序正しい啓蒙思想における近代的自我や理性といった諸概念を破壊し、それらの中立化されていく局面下に横たわるジェンダー配置の諸結果を顕示し始めたとき、フェミニスト理論はポスト・モダンの諸理論を共有し、

反映するところとなった⁴⁾。なぜなら伝統的な西洋知は、自我や理性が実は社会的諸関係に埋め込まれかつ依存しているものであること、また歴史的に特殊的なものであることを隠蔽してきたからである。それらは、経験的条件から自由ではありえない。そしてポスト・モダン思想と同様にフェミニズム思想は、啓蒙思想の超驗的な信条が、実は殆ど西洋の白人男性という一握りの経験を反映し具体化しているのだという疑いを抱き始めたのである。

II. フェミニスト理論における諸問題

こうしてフラックスは、フェミニスト理論のいわば包括的なフレーム・ワークとしての「社会的諸関係」分析と「ポスト・モダン哲学」を呈示したうえで、次にその中心的主題を「ジェンダー」と特定し、そして「ジェンダーがいかに関えられ、考えられず、あるいは考えられようとししないのかを分析する」(p. 626) ことがフェミニスト理論の根本的目的であると言明する。しかしフェミニスト理論家の間に、ジェンダーをめぐる以下の本質的諸問題にかんするコンセンサスがない故に、そこには複雑で論争的な沼地が広がっている (p. 627)。

- (1) ジェンダーとは何か、(2) それは解剖学的性差とどのように関連しているのか、(3) 個人の寿命を通じた社会的な経験として、両性関係はいかに構成され維持されているのか、(4) 両性関係は、階級や人種等の他の社会的諸関係といかに関連しているのか、(5) 両性関係は一定の歴史性をもっているのか、(6) 両性関係の時代的変遷の要因は何か、(7) 両性関係、セクシュアリティ (雌雄性)、個体的アイデンティティ意識の間の関連は何か、(8) ホモ/ヘテロ・セクシュアリティおよび両性関係の間の関連は何か、(9) ただ二つのジェンダーのみが存在するのか、(10) 男性支配の諸形態と両性関係との関連は何か、(11) 両性関係とは平等主義的な社会において衰退するものであるのか、(12) 思考や社会的諸関係の種々の様式において、雄性あるいは雌性という明確な何物かが存在するのか、(13) もし存在するとすれば、それらの区別は生得的なものであるのか、あるいは社会的に仕上げられたものであるのか、(14) ジェンダーによる区分は、社会的に有益かつ必要なものであるのか、(15) もしそう

4) フラックスは、ジュリア・クリステヴァ、リュース・イリガライら、現代フレンチ・フェミニストの名をあげている。そこでは、西欧形而上学の思惟構造に内在する、つねに神・ロゴス・国家・法といった中心へと一元化される象徴秩序の構造化を伴う男性原理的知の在り方の根底的な組替えが議論されている (クリステヴァ『恐怖の権力』枝川昌雄訳、法政大学出版局、1984年; イリガライ『ひとつではない女の性』棚沢直子他訳、勁草書房、1987年、など参照)。しかしフラックスは後段 (第4節) でフレンチ・フェミニストの限界について述べている。ほかにアメリカン・フェミニストの言説としては、Jardine, A., *Gynesis: Configurations of Women and Modernity*, Cornell University Press, 1985. などがあげられている。

であるならば、ジェンダー間の公平を達成しようとするフェミニストの目的にとって、その結論とは何か。

これらの困惑的な諸問題にもかかわらず、フェミニスト理論の最も重要な貢献の一つは「両性関係の存在が問題化されてきた」(p. 627) ことにある。もはやジェンダーは単なる自然的事実として扱われることはなく、単に解剖学上の性差と同一視されることはない。

現代のフェミニスト理論は、前述のように伝統的西洋知の解体とパラダイムの変換をはかる思想的動向の一部根ざしており、それは過去に吟味されなかった諸概念の意味づけについて、根底的・社会的・自覚的に問題化し提示していくことを可能としている。しかし一方、フラックスも指摘するように、分散化・不安定化を伴った社会的・政治的懸念のすべてが、両性関係に根ざしているわけではない。したがってフェミニスト理論は、あらゆる他の諸理論と同様に、「ある一定の社会的経験集合に依拠し、かつそれを反映したもの」(p. 628) となっている。フラックスは、フェミニスト理論の拠るべき「経験集合」を、「両性関係」という基本概念・研究対象として絞り込むことを提起するのである。

III. 関係性のなかでの思考

フラックスの「両性関係」は、「複雑な社会的諸関係の集合を捉え、歴史的に可変の社会的諸過程の変遷集合に連関させる」(p. 628) ために意図されたカテゴリーである。この分析的概念・社会的過程としての両性関係は、複雑かつ不安定な一時的相対性の内にあり、それは相互に連関する部分によって構成されているという意味で、まさに「関係的」(relational) なものである。すなわち、それぞれの部分は他の部分なしには意味を有しない、相互依存的な関係の内にある。

従来の両性関係は、人類の特色や能力を非対称的に分割し、それぞれに帰属させるという差別化されたものであった。すなわち男女という二つの人間類型を排他的なカテゴリーとして措定することによって、すべての人間をいずれか一つのジェンダーに閉じこめてきた。フラックスによれば、ここでの両性関係は、多かれ少なかれ男性によって定義されコントロールされる支配・被支配の関係であった。そしてその支配関係は、女性を「婦人問題」(question)、性的存在 (sex)、あるいは男性にたいする「他者」(others) として定義したり⁵⁾、男性を (少なくともジェンダー抜きに) 普遍的な存在として定義するといった種々のしかたで隠蔽されてきた。したがってアカデミズムにおいても、たとえば「男性問題」や「男性史」が明示的に研究されることはない。近年

5) たとえば、エンゲルス以降のマルクス主義では女性が「婦人問題」として、また実存主義やラカン派の精神分析においては「他者」として扱われている。

ようやく、いかなる文化にも少なくとも“his”, “hers”, “ours”という三つの歴史がありうる可能性が考慮され始め、たとえば「女性史」という〈逸脱者〉にたいするある種の認知が存在するが、一般に“his”と“ours”は同値のものとして仮定されている (p. 629)。依然として、権力関係や生産組織の分析と同等に、「任意の一文化におけるあらゆる局面に両性関係が浸透していく諸結果」(p. 629)の分析が重要視されることは稀である。

フェミニスト理論がその研究対象を〈女性〉に限定する間は、皮肉にも男性を「問題なきもの」あるいは「両性関係による決定を免れているもの」というかたちで特権づけていることになる。フラックスのいう「社会的諸関係」の観点からすれば、男女ともに、「差別化されてはいるが相互連関的なかたちで、ジェンダーの虜 (prisoner of gender) となっている」(p. 629)のである。すなわち男性が保護者 (warden) あるいは管財人 (trustee) とみなされている社会のその範囲で、男女はともに社会的ヒエラルキーのなかに分布して、男性もまた、ジェンダーのルールによって統治されているのである。

IV. フェミニストの理論化と破壊

フラックスによれば、両性関係の研究は、少なくとも(1)個々の社会的領域と歴史にかんする理解に有効な思考の構成物あるいはカテゴリーとしてのジェンダー、(2)他のあらゆる社会的諸関係や諸活動にわけ入り、部分的にはそれらを構成する社会関係としてのジェンダーという、二つの分析規準を伴うべきものである (p. 630)。そして一つの社会的関係としてのジェンダーは、「雄性」(male)と「雌性」(female)の意味づけや、具体的な社会的諸慣行において一方のジェンダーに指定されることによる諸結果にかんする周密な吟味によってのみ理解することができる。またそれらの諸慣行は、文化・年齢・階級・人種・時代ごとにそれぞれ異なり、アプリアリにある特定の文化における唯一の決定要因というものを仮定することはできない。これまでのフェミニスト諸理論は、sex/gender体系、生産組織(性的分業)、表意の諸過程(言語)等にかんする種々の興味深い因果的説明によって個々の社会における両性関係の研究にとって有益な諸仮説を与えてはいるが、それぞれの説明図式はまた、「重大な欠陥をもち、不適切で、過度に決定論的」(p. 630)である。

たとえばルビンは、ジェンダー体系の起源を「生物学的性 (sex) のジェンダーへの変換」と定め、sex と gender の区別を「生物学的セクシュアリティ」と「社会的セクシュアリティ」との対立に依拠させているが⁶⁾、フラックスはこうした対立を、フロイトやラカンらにみられる「人間は不変かつ常に反社会的衝動や欲求に駆りたてられる」

6) Rubin, G., "The Traffic in Women: Notes on the 'Political Economy' of Sex," in R. Reiter (ed), *Toward an Anthropology of Women*, Monthly Review Press, 1975.

といった考え方を反映し、また、まさに既存の両性配置に根ざしているものであるとして問題視している。またフラックスによれば、両性配置の基本的要因を生産組織＝性的分業に定める社会主義フェミニスト⁷⁾の説明装置は、マクス主義的分析がもつ歴史的・哲学的諸欠陥をそのままとり入れている。つまりマルクスが特定の商品生産様式から引出したカテゴリーを、あらゆる歴史的段階における人間生活のあらゆる局面に無批判に適用し、また労働を中心に据えることに付随する諸過程を用いて生産と分業に特権を与えることを踏襲している。生産の概念を「拡張」して殆どあらゆる人間活動の形態を包含しようとする試みは、とりわけ伝統的に女性が行ってきた種々の諸活動をたえず除外し歪めることになる。たとえば妊娠・育児といった家族の構成員間の諸関係は、単に「行為の所有関係」として説明することはできないし、また家族におけるセクシュアリティを「剰余」が“搾取者”の方へ流れるという物理的エネルギーの“交換”(p. 631)として説明することはできない。また、少なくともその発育過程において生産には関与しない児童の存在や活動を無視し、あるいは曖昧化することになる。

さらにフラックスによれば、フレンチ・フェミニスト⁸⁾の多くは「記号・精神・男性・世界/肉体・自然・女性」という「社会的にではなく存在論的に形成されたラディカルな選言」(p. 632)を仮定している。こうした「デカルト的選言」の下では〈肉体〉は「前社会的・前言語的」なものであるが故に、たとえば「女性の経験を回復（あるいは再構成）するために」提起された「肉体の側から書く」(writing from the body)というフレンチ・フェミニストの処方箋は、一貫性を欠いたものになる。

以上の批判を踏まえて、次にフラックスはフェミニスト理論化のメタセオリー的なレベルにおいて貢献するものとして〈ポスト・モダン哲学〉の適用を提起する。フラックスによれば精神・自我・知というものは社会的に構成されており、社会的諸慣行や文脈に依存しているが故に、フェミニスト理論といえどもすべての「絶対的真理」を一度に解明できる「アルキメデスの点」をもつことはできない(p. 633)。社会全体や両性配置といった「見られる対象」を、反歴史的な「空の精神」(empty mind)によって捉えかつ「完全に透明な言語」によって転写するということの可能性は、ポスト・モダン哲学者の脱構築によってきわめて疑わしいものになっている。殊にフーコーは、西洋

7) よく知られた代表的著作として、Kuhn, A. and A. M. Wolpe (eds.), *Feminism and Materialism*, Routledge & Kegan Paul, 1978. がある(邦訳:『マルクス主義フェミニズムの挑戦』, 上野千鶴子他訳, 勁草書房, 1982年)。

8) フレンチ・フェミニズムの全体的な紹介と検討については、『サインズ』の「フレンチ・フェミニズム特集号」(*Signs* 7, no. 1, 1981)に詳しい。また、現実の変革より「文学作品におけるロゴスとの闘い」＝テキスト革命を優位におくそれらの傾向を批判的に考察した論稿としては、同特集号の Jardine, A., "Introduction to Julia Kristeva's 'Women's Time'," *Signs* 7, no. 1, 1981. および国領苑子「クリステヴァとフェミニズム—虚構の言語を媒介に」, 『女性学年報』第8号, 1987年. を参照されたい。

的な知と権力が性・肉体・狂気を抑圧し続けたとして知の特権構造の解体を企てたが、その思想は、絶対的・中立的な知の要求と権力との間の相互連関について光を投じている⁹⁾。「アルキメデスの点」の追求は、真理要求 (truth claims) がある一つの定形をとって他の型はとらないという〈エピステーメー〉に人間が深く囚われていることを隠蔽し、曖昧化することになる。いかなるエピステーメーも支配的なものの権威を脅かす諸理論の抑圧を必要とするように、フェミニスト理論の内でも「フェミニストの観点という限定的テーマの追求は、異なる経験をもつ人々の重要な、しかし不都合な言論の抑圧を要求するかもしれない」(p. 633)。そうした言論の抑圧が、それ自身の(皮相的)権威・一貫性・普遍性にとっての必要条件となり、「ある集合が全体を支配できる範囲においてのみ、実在はワンセットのルールによって統治され、ある特権的な社会関係の集合によって構成される」(p. 634)のである。換言すれば、極度に単純化された理論構築の規準は、〈他者〉の経験の抑圧あるいは否定によってのみ達成されるといえよう。したがって、〈両性関係〉が社会分析に有益なカテゴリーであるためには、その意味づけや思考方法について「可能なかぎり社会的かつ自己批判的」でなければならない。

V. 自然という障害

「両性関係」の解明にかんする一大障害は、“gender”と“sex”との関係の識別に伴う困難さであった。少なくともアリストテレス以来、男女の差異は生物学という「自然的事実」(natural facts)の部類に属し、したがって前社会的・非社会的なものと同様視されてきた。ここにおいて両性関係は、概念上男性と女性というただ二つの対立的タームあるいは異質のタイプによって構成される場所となった。フェミニスト理論の主要な焦点がジェンダーを「非自然的なものとする」(denaturalize)にあるとしても、「自然的」(natural)という概念にたいする意味づけもまた、容易なものではない。

自然的世界の「謎解き」が、西洋科学の性向である。自然は人間活動の対象(object)であり産物(product)であり、しだいに「社会的・文化的」なものから独立した対立物であることをやめていく。そしてつい最近まで、そうした謎解きによる「変換能力」を免れた一つの領域が、男女の生物学的性差であった。今日まで、西洋思想は人間自身から自然を〈救う〉ために、「生得的性(sex)・生物学・自然・ジェンダーを同等視し、それらを文化的・社会的・人間に対立させてきた」(p. 635)。ジェンダーという概念はこうして、自然的世界における人間活動の双価性(ambivalence)をめぐる複雑なメタファーとなる。しかしながらフラックスによれば、そうした双価性のメタファーとしてジェンダーを用いることは、その双価性そのものにかんする研究を阻むことになる。

9) フラックスは依拠すべきポスト・モダン哲学の〈源泉〉として、フーコーのほか、デリダ、ローティ、ヴィトゲンシュタインらの名をあげている。

前記の概念集合は、実は「生得的性 (sex)・生物学・自然・女性〈対〉 文化的・社会的・男性」という形をとっており、女性は現代西欧社会という「無情な」(heartless) 世界、一層機械化され工業化された世界からの「最後の避難所」となっている (p. 635)。そうした思考様式においては、生物学=自然という概念がもしかすると社会的諸関係に根ざしている可能性が隠蔽されたままである。したがってジェンダーを一つの社会的関係として理解するために、フェミニスト理論家は「生物学・性 (sex)・ジェンダー・自然に付与された意味づけを、さらに解体する必要がある」(p. 635)。

単に“sex”と“gender”という二つのタームを分離するといった相互排他的選言は、たとえば自然と文化、肉体と精神とを対置させる二項対立的認識論に依存することになる。解剖学(肉体)は精神と何の関連もないのか、あるいは分類上女性の肉体をもつことが、社会的経験の構成においていかなる違いを形成するのかについて再考するにつれて、殆どのフェミニストは、両性関係が単なる解剖学の結果なのではないことを主張するであろう。

たしかに男女の解剖学的差異は存在し、それは「種の再生産」における男女の異なった貢献に結びついている。しかしそれはまた、人間の身体的特徴にかんする観察のほんの一部にすぎない。たとえば人間の脳の構造や機能の卓越した複雑性を他の生物と比較するとき、人間の男女の類似性はきわめて顕著なものとなる。そうであるならば、フラックスが問うように「人間の複雑な自我意識や社会的意味あいや構造が、なぜ解剖学的差異という比較的狭い範囲に基づき正当化されなければならないのであろうか」(p. 636)。男女の解剖学的差異が種の再生産と結びついているということは、その問いにたいする一つのありうる答えであるだろう。したがってフラックスによれば、解剖学的差異はきわめて複雑に性衝動 (sexuality) と結びついた一つのまとまった諸関係の複合体となり、そして相異なる二分化されたジェンダーによる両性関係は「自然的な」排他的カテゴリーとしての意味づけを付与される。また人間は両性関係が社会関係 (= 支配関係) を構成している世界に住むゆえに、解剖学 (生物学)、性衝動、再生産等にかんする男女の識別は、その所与の支配・被支配の両性関係に根ざし、それを反映したものになっている。したがって次には「この両性関係の存在が、人間存在の諸事実を秩序づけ解釈するのに役立つのであり、換言すれば、生物学がジェンダーのメタファーになりうるのと全く同様に、ジェンダーが生物学のメタファーになりうるのである」(p. 637)。

VI. ジェンダーの虜——フェミニスト理論のディレンマ

フラックスによれば、両性関係と種の再生産・セクシュアリティ等の人間存在にかかわる重要な諸局面との関連は、「自然的なものと社会的なものとの融合と、この両者間の過度にラディカルな峻別」(p. 637)の双方を可能にする。しばしば〈女性〉の解釈に際しては、フェミニスト理論においてさえも「自然的」なものと「社会的」なものと

は融合したものとなっており、また女性は身体性・差異性・具象性として象徴化されがちである¹⁰⁾。フェミニスト理論の構築に際してはたとえば母親業 (mothering)¹¹⁾ という慣行にかんする概念が、社会的諸関係という複雑かつ矛盾的な集合の一局面を捉える可能性があることを見失ってはならない。複雑で変動的な諸関係に直面するとき、人はそれらを単一の閉包 (closure)¹²⁾ に還元しようと試みがちである。そうした「還元的方法」のなかには、シショワらによる解剖学上の相違に伴う「女性的な局面の賛美」への圧縮が含まれ¹³⁾、それは「女性と肉体との等置」を再生している。

また他方、男女双方の生活における肉体的経験の意味や重要性を「生産関係あるいは再生産の部分集合として還元する」(p. 638) というもう一つの傾向も存在する。それらの議論においては、たとえばエルシュテインらによって、非人格化 (depersonalize) され原子化 (atomize) された国家権力からの最後の保護的手段として一方のジェンダーに偏した分業保存の必要性が説かれることになる¹⁴⁾。そこでは〈家族〉が主として母子間の血族関係的紐帯からなる「親密で情緒的な自然関係の王国」(p. 638) として肯定的に仮定され、国家と労働からなる非人格的王国 (男性世界) に対置されている。

あるいはまた、〈家族〉が「ジェンダー闘争や再生産の場」、すなわちそれ自身が分業をもち、剰余の源泉 (女性の労働) をもち、生産物 (子供ないし労働者) をもつような「経済体制のミニチュア」としてのみ解釈されることになる¹⁵⁾。ここでは、女性が家族 (家庭) に結びつけて考える複雑なファンタジーや矛盾的な願望や経験が表現されず、また自認されないままになっている。そしてそうした自己分析の欠落は、男女の「差異の源泉」にかんする幾つかの認識を欠くことになる。

さらに女性のセクシュアリティは時折、男性支配の一表式に還元されることがある。それはたとえば、「ジェンダーの社会化とは、女性が自らを男性にたいする性的存在 (sexual being) として同定するようになる過程である」(p. 639) というマッキンノンら

-
- 10) 女性の差異性 (difference) については、Gilligan, C., *In a Different Voice*, Harvard University Press, 1982 (邦訳:『もうひとつの声』, 岩男寿美子監訳, 川島書店, 1986年) において詳細に論じられている。女性の道徳判断は、男性の視点から構成された従来の発達理論の枠組には適合しない異なるファクターが基本となっているとし、性差をふまえた普遍的理論構築の必要性を提言している。
 - 11) 母親業 (mothering) について論じた代表的著作として、Chodorow, N., *The Reproduction of Mothering*, University of California Press, 1978 (邦訳:『母親業の再生産』, 大塚光子他訳, 新曜社, 1984年) がある。
 - 12) 閉包とは、ある与えられた複数の部分集合を含む最小の閉集合をあらわす。
 - 13) Cixous, H., "Sorties," in H. Cixous and C. Clement (eds.), *The Newly Born Woman*, Cornell University Press, 1986.
 - 14) Elshtain, J. B., *Public Man, Private Woman*, Princeton University Press, 1981: p. 314, p. 331.
 - 15) Kuhn and Wolpe (eds.), *op. cit.*

の主張にせめられる¹⁶⁾。またこれと代替的に、女性のセクシュアリティの本質が、母娘間の準生物的な原初的絆に根ざしているというリッチらによる議論もある¹⁷⁾。そうした言説においては、「ファンタジーや内なる世界 (internal world) は、シンボルにおいてのみ表示され、現実的な社会的諸関係においては表示されない」(p. 639) ことになる。こうして、フェミニスト理論それ自身が、公的・私的領域分割の〈フェミニスト版〉を再生することになる。あるいはファイアーストンらのラディカル・フェミニストは、本有的男性性向 (innate male drive) としての攻撃性と支配欲を、歴史の実体 (substance) と目的論 (teleology) を駆動させる動力として仮定している¹⁸⁾。

多くのフェミニスト理論が、母親業による女性の意識形成の経路について描いてきたが、依然として「父親業」(fathering) は男性や子どもの意識にとって非本質的 (extrinsic) なものとみなされている。また女性の地位や男女の自我意識における育児の諸形態の重要性がしばしば強調されるが、そこでは依然として、万人が自足的な成人 (adult) であると仮定された社会的理論が描かれている。たとえば母親業や家族に焦点をあわせたヤロムらによる最近の著述においても、「人類 (human being) としての児童」あるいは「人間 (person) 間の一関係としての母親業」にかんする議論は殆どない¹⁹⁾。

フラックスによれば現行の両性配置は、人間と経験との間の諸関係を認めない男性と、諸関係内における種々の相違を認められない女性をつくりだし、いずれのジェンダーにおいても、経験をどちらか一種類のものとして扱う傾向と、差異や両義性や葛藤に狭量な傾向をつくりだしている。女性があらゆる社会の構成部分であるかぎり、その思考は自己認識にかんする文化結合的 (culture-bound) 諸様式から自由ではありえない。男性と同様に女性もまた、男性性 (masculinity) ・女性性 (femininity) という支配的ジェンダー概念の虜となっている。ジェンダーが、生得的に異なる存在の対立としてではなく一つの社会的関係としてみなされないならば、個々の社会における女性(または男性)の種々の権力や抑圧にかんする多様性や限界は識別されないであろう。

ここでフラックスは、フェミニスト理論の「四重の課題」を、次のように示唆している (p. 641)。

- (1) 人間が住む社会的世界にかんするフェミニストの観点を明示すること。
- (2) 人間がそれらの世界によっていかなる影響を受けているかについて考察すること。

16) MacKinnon, C., "Feminism, Marxism, Method, and the State: An Agenda for Theory," *Signs* 7, no. 3, 1982: p. 531.

17) Rich, A., "Compulsory Heterosexuality and Lesbian Existence," *Signs* 5, no. 4, 1980.

18) Firestone, S., *The Dialectic of Sex*, Bantam Books, 1970.

19) Thorne, B. and M. Yalom (eds.), *Rethinking the Family*, Longman, Inc., 1983.

- (3) それらの世界にかんする思考方法が、現存する知と力の諸関係に掛かり合う経路を考察すること。
- (4) それらの世界が変容されるべき道筋を想起すること。

フラックスによれば、現存の両性関係は支配関係であるが故に、フェミニスト理論は「補正的」(compensatory)な側面のみならず「批判的」(critical)な側面をもつことによって支配的＝男性的観点の下で抑圧され、明示されず、否定されてきた社会的諸関係の局面を回復し、女性とその活動の歴史を、文化がそれら自身について語る記述と物語のなかに回復し著わす必要がある。しかしまた一方、家事・育児等のいわゆる女性的活動じしんが、任意の社会を形成する社会的諸関係の「くもの巣」内での女性的活動の配置をつうじて構成されていく様相について考察しなければならない。

さらにフェミニスト理論は、卓越性や道徳性にかんする「価値観の再評価」を伴うべきであるが、それに際しては単に対置者(＝女性)の優越性のみを強調することがあってはならない。往々にしてフェミニスト理論は、関係性の内での存在 (being-in-relations) に自律性 (autonomy) を対置させる傾向がある。そうした自律性は、「関係性」を伴わずには閉所恐怖症 (claustrophobic) に陥り、容易に支配関係に墮してしまう可能性がある。フェミニズム理論における「女性の称賛」さえ、ある意味では女性を限定的な場のなかに封じ込めたいという願望によって動機づけられていることに気づく必要がある。支配の諸関係の存在を論ずるに際して、女性を全体として無垢 (innocent) の、受動的な存在として一元化することは慎むべきであろう。

フラックスによれば、女性にかんする考察は、諸学のメインストリームにおいて抑圧されてきた幾つかの社会的局面を解明することはできようが、何人も「女性を証明する」ことはできない。「女性」という集合は、「男性」にたいする既存の諸関係という可変的な特定の集合の範囲内でのみ存在するからである。したがって「いかなるフェミニストの観点も、必然的に部分的 (partial) なものとなる」(p. 642) といえよう。

最後に、フラックスは次のように結んでいる。社会的諸関係の「外側」にある何らかの力や実在(たとえば歴史、理性、進歩、科学、超越的本質など)が、人間を差別や偏見から救うことはありえない。フェミニスト理論の指向や連帯 (alliance) は、人間社会の「脱中心化」を図る諸理論と一致している。しかし一方、その脱中心化の動機やビジョンについて疑ってみる余地は留保しておくべきであろう。フェミニスト理論は、ポスト・モダン主義の諸思想と同様、両義性や葛藤や多様性を寛容しつつ解釈し、また人間が秩序や構造に賦課する欲求の根源を解明することを鼓舞することであろう。そのとき「実在」は、より不安定で複雑で無秩序なものとして現れる。おそらくこの意味で、「女性は文化の敵である」というフロイトの声明²⁰⁾は、正しかったといえよう。

20) Freud, S., *Civilization and Its Discontents*, W. W. Norton & Co., 1961: pp. 50-51.

おわりに

フラックスによって提起された重要な側面は、近代主義的認識に内在化された「男性・文化/女性・自然」という二項対置的な知の構図とパラダイムそのものにたいする批判的視点を呈示していることにあるといえよう。この視点が、第一にポスト・モダン哲学の文脈と接合し、文化における女性の恒常的な差別・抑圧の深層構造を照らしだす。そして第二に「社会的諸関係」分析によって近代的平等概念そのものの歴史・社会性と特異性を指摘し、その概念を〈相対化〉して近代的平等論のなかに差異ある実質的平等のあり方を問うことが意図されていると思われる。

そこで新たに呈示されるのは、男女の性差ではなく個々の差異をもって存在する人間を社会における「関係性」のなかで問題化するという視点である。したがってそれは、普遍概念としての「男性=人間」を拡張して女性という辺境にまで及ぼすという第一期女性学における普遍主義を意味せず、またそこでは第二期において強調された男性原理にたいする女性原理の対置も、二項対置的理論構造の枠内にあるものとして否定され、超克すべきものとされている。そしていわば「第三期」における新たな視点において焦点を合わせるべき中心的主題が「ジェンダー」なのであり、またここにおいて従来の性役割の枠を超えた、年齢・階級・人種等の社会的ファクターを含む「両性関係」(gender relations)の考察が可能となるのである。換言するならば、生物学的差異に応じた行動規範の男女差がどのように社会的につくりあげられているかというジェンダー論の観点を第一の分析的カテゴリーとして置くことによって、フェミニスト理論は、たえず社会の組織にかんする基本的諸問題—家族および家族と国家の関係、あるいは男女間の政治的・社会的力関係をめぐる議論—に触れることになる。²¹⁾そしてこの意味で、フラックスのいう「部分的」(partial)なフェミニスト理論は、種々の社会的ファクターを包含する複眼的なものとして現われる可能性を有しているといえよう。

また、それがさらに有効なものであるためには、オーフェンが提唱しているように²²⁾、女性の地位が社会的・政治的にどのように変遷してきたかを歴史的に辿ることによって漸次蓄積される知見を、種々の異なる文化的伝統の中に位置づけて考察するという「比較文化的」な眼をあわせもつことが重要であろうと思われる。

21) Offen, K., "Defining Feminism: A Comparative Historical Approach," *Signs* 14, no. 1, 1988: p. 151.

22) *Ibid.*: p. 120.

〔付記〕 Jane Flax は、米国ハワード大学政治学部助教授、精神分析家。著書に *Thinking Fragments: Psychoanalysis, Feminism, and Postmodernism in the Contemporary West*, University of California Press, 1989. がある。

なお、本稿でとりあげたフラックス論文は、Malson, M. et al. (eds.), *Feminist Theory in Practice and Process*, University of Chicago Press, 1989. に選集として再録されている。